



特集

私の考える保育者の専門性

制度が急激に変化する中で、保育者の専門性が問われている。その答えを誰かに求めるのではなく、保育に関わる一人一人が、この問いに真摯に向き合い、考えを交流していくことが、今求められている。

保育者の専門性とトラブル場面

友定 啓子

専門性と適性は違う。専門性は育てることができるし、経験によって磨いていくことができる。しかし適性は、その専門性を磨く上での前提となるものである。子どもと一緒にいることがうれしい、子どもがうれしいと自分もうれしい、子どもについて理解を深めていくことに充実感を感じるなど、保育者としての前提となるその人自身の思考や感情のありようである。

私たちは今、子どもたちのトラブル場面に保育者がどうかかわっているかというテーマで研究を進めているが、その中で、保育学生を通して保育者の専門性を考えさせられることが多い。保育学生は、私たちが当たり前と思うこと以前のところで、困ったりわからなかったりしている。ある学生は、トラブル場面では悪い方に必ず謝らせなければならないと思っていた。善悪が何より重要で、暴力をふるった方が悪いとしか考えていなかった。どの子どもにも平等にしなければならないので、いつも同じにかかわらなくてはいけないし、取り合いなどはじゃんけんや交代が一番いいと思っていた。しかし、現実の子どもたちはそれに全く応じてくれないので、とても困っていた。これは誰でも考えることで専門家とは言い難い。

このことをある熟練の保育者に話したところ、自分も若い時はそうだったとおっしゃった。ということは、これは適性ではなく専門性の問題だということである。そうであれば、伝えたり育てたりできるはずだ。事実、カンファレンスで学生たちの考えは広がっていた。トラブル場面を学生たちは恐れている。そこで保育者としての力量が問われると感じている。どこかにいいやり方があって、自分たちがそれを知らないの

だと思っている。一方で、熟練の保育者たちは、子どもや状況にあわせて自然体でやっているように見える。場面ごとにかかわりは違い、マニュアルのように単純に教えられるものではなく、その都度自分で考えていくことだと思っているようだった。熟練保育者のしなやかさあるいはさりげなさというものは、実は、ちゃんとした思考や経験の上に成り立っているものなのだが、そう見えないところがあって、伝えることに困難を伴う。そこで私たちは、たくさんの事例があれば何かが見えるはずとトラブル場面の保育記録を集めてみた。508枚の保育記録からかかわりを分析して、4つのかかわりの方向を抽出した。①子どもの自己回復を支える②友達との共生の体験をする③一緒に解決法を探る④価値や規範を伝える、の4つである。保育者はこれらを状況に応じて多彩に組み合わせていることがみえた。そしてまた、これが経験とともに多様にしなやかに変化していて、保育者の成長もうかがわれた。トラブル場面が子どもの成長にとって重要だということは誰でも知っている。しかし、専門家でない人の多くは、自分がトラブルを解決しようとして、子どもが育つ機会を逃す。保育の専門家は、トラブル場面に子どもの発達をみとり、子どもがその問題に取り組めるように支えていく。子どもは保育者に支えられて、自分や相手を知り、解決法を考え、ものの考え方を学ぶことができる。

保育者には、多面的な専門性が要求されている。私が考える保育者の専門性とは、子ども一人ひとりに合わせて、持続的にかかわり続けることで子どもの成長を支え、その中で自分の保育思想を育むところにあると思う。願わくは、保育記録を作成し、それを次の世代にわかるように伝えてほしいと思う。保育研究者として、そのお手伝いができたらと考えている。

●Profile

友定 啓子 (ともさだ けいこ)
山口大学教育学部 幼児の人間関係やそれを育む保育者のかかわりについて関心を持ち、現在は「子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか」というテーマで共同研究をしています。

子どもと共に育つ保育者

井上 裕美子

これから保育士になろうとする学生に出会う機会があると必ずする質問がある。「なぜ保育士になろうと思ったのか」と問いかけると、「子どもが小さいときから好きでした」という答えが返ってくるが多い。「では、子どもと何をしたいですか」と問いかけると「子どもといっばい遊びたい」「大好きな子どものために色々教えたい」と答えてくる。

では保育士になって、毎日の園生活の中で、子どもと遊び込んでいる保育士がどれくらいいるのだろう。また、色々子どものために教えたいといった保育士は、何を教えているのだろう。

保育の研修会では本の販売もある。そのとき保育士が好んで手にするのは、手遊び、指遊び、体を使った遊び、ルールのある遊びなどを教えてくれるマニュアル的な本が多い。専門的な本にはなかなか手が伸びていかない。

またあるとき、保育園に保育雑誌を扱う業者の方が来た。「これはあちこちの保育園の先生方にとっても喜ばれている子どもの歌の本です。いかがですか」と言われ、その本を手に取り驚いた。階名が書かれないかにも親切な本だった。私は思わず「保育士は階名くらい読めます」と言い放ってしまった。

「保育指針」が改定された。でも保育士の資質向上が強調されているのは、今回からではない。以前の保育指針にも書かれていた。しかし、保育所にそして保育者に求められるものが多くなっていく中で、保育者は子どもの方を向いて保育しているのかと考えさせられることが多い。

養成校を卒業して1年目から保育者としての毎日が始まる。子どもと共に生活をしながら、育ちを理解し、そしてより良く育つために援助しなくてはならない。一緒に遊ぶことを夢見ていた保育者の生活はなかなか思いどおりに運ばないのが常である。また子どもの保育だけではなく、保護者との対応もしなくてはならない。

保育者の専門性を考えるとき、1年目の保育者も永年経験のある保育者も、外側から見るとどちらも専門家として見なされている。そのとき、その年齢の育ちを知っているかどうかというのではなく、常に目の前の子どもと向き合い、育ちを大切にしているかが問われているのだと思う。

永年保育者として子どもと一緒に生活する中で、この年齢では、こういう発達をするだろうというマンネリ化した考え方で保育しては専門性とは言い難

い。子どもの育ちを知るためには、子どもや保育に関わる専門書を読むことが必要であると思う。その他にも社会一般的なことなどを知ることが大切である。それにより、子どもに対する関わりも深められていく。

以前保育者の大先輩に教わったことがある。子どもに何かを伝えるとき、保育者が何も持っていなければ何も出てこない。商売でも、物を売るときにはまず仕入れが必要である。保育者とは、子どもに何かを伝える仕事である。そのためには、普段から仕入れを怠らないことが大切である。子どもと一緒に生活するために保育者という仕事を選んだのだから、その子どものために、常に保育者としての質を磨くことが必要なことである。

保育者の専門性とは、子どもの成長を十分に理解し、保育者間の連携を図りそして保護者の協力の下に保育することではないだろうか。そのためには、保育者自身が色々な機会を捉え、研鑽する必要があるのではないかと考えている。

●Profile

井上 裕美子 (いのうえ ゆみこ)

鹿児島県霧島市安良保育園に勤務する保育士。2006年4月より同保育園園長。特に0、1歳児や障害児、そして子育て支援に関わる。子どもの生活に寄り添う保育を心がけている。

大学院研修の機会から考えた 保育者の専門性

野崎 美幸

幼稚園に勤務する立場から考えると、専門性とは次のようなことだと思います。子どもの姿からその行為の意味を読み取ること、そして、なぜ、自分はそのような援助行為をしたのか、援助が適切か否かにかかわらず、自覚的にとらえていくということです。この後者については、実際の保育行為の中で行われていることであり、瞬時の判断が伴っているため、自覚的にとらえることが難しいと言えます。

昨年度まで、私は、保育現場から離れ、大学院で研修する機会を得ていました。その際に、自身の実践を中心に、この自覚しにくい行為を振り返り、その判断の根拠を明らかにすることを研究の中核としてきました。このことに興味をもったのは、園内研究の中での同僚の一言「なぜ、このような環境を提示したのか」という問いがきっかけとなりました。その時に私は「ただなんとなく」という感覚的にとらえていたような返答しかできませんでした。それまでも、私は日々保育を振り返り、記録をつけながら、自身の行為の意味を丁寧に省察してきていたつもりでした。それにも

かわらず、意識の中に残っていなかったという事実に出会ったのです。

この理由には、いくつかのことが関係していると思いますが、私なりに考えると、次の二つがあると思います。一つは、様々な園務をこなすことが精一杯で、記録を記していたとしても、省察する時間のゆとりが十分でないということです。このことは、フィールドワークでも、多くの保育者が感じていることが明らかになりました。

そして、もう一つは、当事者には気付きにくいということです。これについては、例えば、ある程度の経験が重なってくると、自分のこれまで培ってきた経験則によって、保育行為を行っている場合があります。それ故に、自身では気が付きにくい、そして、気付きにくいために、その行為の意味を問うことが省かれてしまっているということが見えてきました。このことは、私自身が保育現場から少し離れ、これまでの自分の実践をじっくりと振り返り、改めて問い直し、深めたことによって見えてきたことです。この自分の実践の問い直しは、自己課題を明確にすることだけではなく、何よりも「学ぶ」ということのおもしろさや探求心をもたらしてくれました。

これまでも、研修の機会がなかったわけではありません。しかし、その多くは、講演や講義が中心であり、当然ながら、保育者自らが課題を追求する機会は少なく、どうしても受け身になりがちと言えます。単に研修の機会があれば、専門性が高まるのではなく、むしろ、保育者自らが実践を振り返る中で、自己課題を見出し、探求するおもしろさを感じていくことが、本当の意味で、専門性を高めていくことにつながると考えています。

私のように、現場から離れ、自分の実践を見つめ直すという機会は、ごく一部の恵まれた境遇であるように思われるかもしれませんが、しかし、広く海外を見渡すと、このような機会が制度として保障されている国もあるようです。もちろん、日々の保育の中で、保育者として成長していくことも大切です。しかし、幼稚園教育の重要性と保育者の資質向上が求められているからこそ、保育現場からあえて離れて、自身の実践を振り返る機会が制度として保障されることも必要なのではないのでしょうか。

●Profile

野崎 美幸 (のざき みゆき)

文京区立千駄木幼稚園教諭

昨年度までの2年間、学術休職し、大学院で研修していました。自らの保育実践から、保育者の行う環境の構成に視点をおき、その判断の根拠を省察することを研究のテーマとしてきました。復帰した現在も、引き続き行っているところです。

専門性の「芽生え」を感じるとき

山本 哲郎

私の園は、20代の保育者が多い。その若い保育者たちが、どのようにしたら真の保育者として育っていくのか、また、先輩保育者である私たちが、どう育てていけばいいのかが課題である。保育者の育ちを考えていくうえで、「保育者の専門性」は、もっとも重要なキーワードであろう。

若い保育者たちは、日々子どもたちと生活していく中で、自分の思いが伝わらなかったり、クラス運営がうまくいかなかったりと、自分が思い描いていた保育とのギャップに悩み始める。そこには、不安もありながら、保育者として、担任として、できてあたりまえという思いがあるように思う。

保育がうまくいかないのを子どものせいにしてしまうことも多い。例えば、「子どもが話を聞いてくれない」「私は伝えているのに」などと、自分で言い訳を用意し、ギャップを埋めようとする。その姿に保育者の専門性は感じられない。

私の園では、園内研や事例検討を通して、自分の保育について話し、参加してくださる研究者の方々や同僚の、いろいろな意見を聞く機会がある。話し合っていく中で、保育がうまくいかないのは、子どもの側に問題があるのではなく、自分のかかわりのまずさにあり、自分が変わらなくてはいけない、ということに少しずつであるが、気付いていっている。

しかし、それを自分の保育に生かすことはなかなかできることではない。それでも、生かそうとする気持ちを持つこと、そして、今の自分に何ができるかを考え、自分にできることからやってみようとするのが、大切なのだと思う。

園生活の中で、子どもと向き合いながら、子どもの成長の見通しや、自分なりの思いを持って、子どもにかかわっていく。その中で自分の気持ちの変化や、子どもの変化にも少しずつ気付き、自分のかかわりを修正したりしながら、子どもとともに自分自身も育っていくのではないだろうか。

とはいうものの、園内研や事例検討に義務感で参加し、そこに自ら育とうという気持ちがなくては、このような気付きも成長もないだろう。

いい保育ができるかどうかは別として、自分の保育について、子どもとのかかわりを自問自答しながら、たどたどしくても自分自身の言葉で語ることが大事なのだろう。その語りの中に、子どもや保育者の姿が見えたとき、そこに私は、保育者の専門性の「芽生え」

を感じる。

この専門性の「芽」が出ていないところでは、保育に関する知識や技術がどんなに優れていようと、保育者としての育ちは望めないのではないかと。保育は、人を育てていく仕事だからである。

このようなことは、保育者だったら、できるのがあたりまえだと思うかもしれない、しかし、このあたりまえのことができないところに、保育の難しさがあるように思う。私が、若い保育者と一緒に生活していく中で、感じることである。

●Profile

山本 哲郎（やまもと てつろう）
和歌山県新宮市 たづはら保育園園長
祖父の代から数えて3代目。若い保育者と一緒に生活していく中で、保育者の育ちについて悩み、考える日々である。

私の考える保育者の専門性とは

翌日は一歩進んだ保育者として…

永田 陽子

保育者は毎日子ども達と身体を通してかかわりながら、信頼関係を築き、子どもの気持ちや心の動きを感じ取り、発達に必要な経験を自ら獲得していけるように援助している実践者です。その中で何が専門性なのかを考えると、保育者は集団の中で一人一人の育ちを保障していくことです。そこでは子どもを共感的に受け止める、発達を理解する、援助方法を考える、指導計画を作成する、教材研究をする、ピアノが弾ける、造形ができる等の保育技術の力も要求され多岐に渡っています。このことが他の専門職と違い、専門性が曖昧になっているところでもあるようです。私も長年保育をしてきましたが、保育の中で起きていることは保育者を含めた多様な関係の中で起こっているため、保育実践を言語化して他者に伝える難しさを感じています。

私は自分の保育に迷った時、倉橋惣三著『育ての心(上)』（1976）の文章を読み返し、立ち位置を確認します。「子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもある。しまったと急に冷汗の流れ出ることもある。ああ済まないことしたと、その子の顔が見えてくることもある。——体保育は……。一体私は……。とまで思い込まれることも屢々である。大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んでいけるから」とあります。保

育を省みることが保育者自身を省みることでもあり、「…翌日は一歩進んだ保育者として、…」成長していくことになりそれが専門性に向かっていくのではないかと思います。そこには距離を持って多様な視点で子どもを捉えることも必要ですが、今わからなくても気にかけていくことで、体験したことが繋がり、分かっていくことになっていきます。それは多分一人一人の子どもの体験を繋げ、育ちを言語化し意識化させていく保育者の援助と同じではないかと思います。また自分の保育を同僚や保護者などに話すこと（自分の心で感じて、自分で考えて、自分の言葉で）で得たヒントなどを自分なりに実践に活用することによって、自分の保育の考えや子どもの見方が変化し、向上していくことに喜びを感じていくことです。

また、この保育を省察する基盤になる子どもの捉え方にも保育者としての大切な専門性があるのではないかと思います。保育者はどんな子どもであっても愛し、子どもの可能性を信じる気持ちを持つことです。そのことは子どもを共感的に受け止め、その子にとって今一番いいこと、必要とされることを考えぬいて援助していくことに繋がっていきます。同じように保護者に対しても指導するというのではなく、保護者の立場に立って気持ちを受け止め、分り易く伝え、理解してもらうことが必要です。例えば、保護者から「うちの子が『私はしていないのに、先生が私がしたというの』と泣いていました」と言ってきた時に、そんなことを言う訳がない時でも、「Aちゃんはそう言ったと思っているのですね。悲しい思いをさせてしまいました。ご心配かけて申し訳ありませんでした」と言って、子どもや保護者との関係を築き直していきます。しかしその時に「私はそんなこと言っていない」という言い方をすれば、保護者としては、「先生はうちの子が嘘をついたと思っている」と考えやすいということを自覚しなければなりません。

今、園長として考えることは、私も含めて一人一人の保育者が保育の仕事にプロ意識を持ち保育者の専門性は何かを問い続け、「翌日は一歩進んだ保育者として再び子どもの方へ入り込んでいける」園環境を日々努力し、作り上げていくことです。

●Profile

永田 陽子（ながた ようこ）
日本女子大学附属豊明幼稚園 園長
一人一人の子どもの主体性を尊重した保育を追求し、育ちを保障する保育環境を考えている。

個々の子どもの行為の意味理解に 立脚した専門性

大豆生田 啓友

ある3歳児の保護者からこんな話を聞いた。わが子A児が友達と遊べていないことが気になり、担任保育者に聞いた時のことである。担任保育者は、入園当初、自分のロッカーの前から一歩も動けない不安な様子であったA児が、だんだん自分から遊びはじめるようになり、今日も砂場で何度もプリンカップの型抜き遊びをしたことを具体的に詳しく話してくれた。A児が園生活の場や、保育者、友達に次第に安心感が持てるようになってきたたくさんのエピソードがあったとのこと。また、言葉をかかわすなどA児が直接友達とかかわって遊んでいないものの、実際には、友達のやっているプリンの作り方をまねたり、友達の会話を意識しながら動くなど、本人には「一緒に気持ち」があるということを保育者から聞き、保護者はわが子の思いを強く知る機会となり、当初「友達と遊んでいない」と、表面的にしか捉えていなかったことをとても反省したと私に話してくれた。どこにでもありそうなエピソードかもしれないが、こうした日常的な生活を基盤とした営みの中にこそ、重要な保育者の専門性が潜んでいると考える。

保護者は、「できた」「できない」という外に見える一般的な基準から子ども理解がなされがちである。一方保育者は、先の担任保育者のように個々の子どもの生活に寄り添い、これまでの具体的な姿の流れを通して、ロッカーから一歩も動けなかった思いや、砂場で他の友達とどのような思いでいるかという、徹底した子どもの立場にたって、その子のストーリーから子ども理解を深める。つまり、保育者は、「A児がなぜそうしているのか」という内面（行為の意味）に目を向けるのである。ここに一般の人とプロの保育者の子ども理解の大きな違いがある。しかし、これは決して簡単なことではない。だから保育者は日々、記録などによる保育の振り返り（省察）を通して子ども理解を深め、子どもの気持ちに共感しながら、瞬時の「判断」で子どもに対応し、「手立て」を打つのである。これは一般的に保育者の「勘」や「コツ」と言われるものであるが、これこそが専門性に立脚した保育者の姿である。この子どもの生活に寄り添う中での、子どもの行為の意味や発達理解にこそ、もっとも重要な第一の専門性が存在する。

第二は、この子ども理解に基づき、保育を具体的に展開することにある。それは、子どもの姿や経験を見通して計画を立てること、環境を構成すること、個と

集団や関係性を生かした活動の展開、状況に応じて多様な保育者の役割を演じること等々である。先にあげた事例の背後にもこうした保育者の働きがあって、A児の主体性が生み出されていると推察される。

第三は、保護者あるいは社会に対して、乳幼児期の子どもが経験していることの意味や、その経験世界の素晴らしさを「見える」ように発信することである。旭山動物園の成功は、ペンギンならペンギンのありのままの魅力を客に見えるように仕掛けたことにある。動物園と保育は同じではないが、乳幼児期の子どもの「さながらの生活」がいかに意味あるものであるかを「見える」ように工夫していくかが求められる。これからの保育者の専門性として、園の中で保育を完結させず、保護者や家庭、学校など地域との協働的な関係性を持つことがとても重要になることは言うまでもない。（保護者支援もその大きな専門性であるが、ここでは触れない。）だからこそ、その根幹に、個々の子どもの園生活の豊かな物語りがあることが保育者の専門性として欠かせないのである。